

を述べたもの、5) ヒト胎児心臓の灌流摘出標本による実験から低酸素環境下に現われる胎児の徐脈が、房室伝導障害と心房から心室にペースメーカーが変遷することによつておこることを認め、出生前児監視における基礎的問題をとりあげたものに分けられる。各演題を要約すれば、① イスラエルの Eljahn らは胎児心拍数変化・胎動減少が胎児死亡に先行し、オキントシン・チャレンジテストを始めとする種々のテストの集積の必要性を、② Eberhard ら (U.S.A.) は1970年無監視分娩6,724例と1977年監視分娩8,237例との周産期死亡率および帝切率などのコンピュータ分析による比較から胎児監視の有用性を述べ、帝切率の増加は認められるが、胎児監視のキメ細かさによる周産期死亡・重症仮死の減少を強調、③ Ingrid ら (西独) は前述の3)に属し、Eljahn らと同じく胎児心拍数 acceleration と胎動との関連を重視、④ Zbigniew ら (ポーランド) は胎児心拍数 deceleration の分析と臍動静脈血・新生児血の pH・PO₂・PCO₂・ベースエキセスまた、apgar score との相関について発表、⑤ Volker ら (西独) は前述の4)を1976~1978年間の全分娩数5,651例のコンピュータ分析から述べ、⑥ Wernerら (西独) は胎児心拍数の deceleration, acceleration 分析において、彼らのオンライン方式・リアルタイム方式を導入したものが従来法に勝ることを強調し、⑦ Feliksas ら (ソビエト) は、前述の5)である。(小国親久)

FC-84b (Abs. No. 841~846)

Fetal and Neonatal Pathology

本セッションは (OCT oxytocin challenge test) を主題とした胎児予後の予測に関する報告である。〔盲検法による OCT の予後 K. Staisch U.S.A.〕はハイリスク妊娠217例に435回のテストを行い、その成績を伏せたまま分娩中の遅発性徐脈、5分後アプガー、新生児罹患指数、周産期死亡の発生率を比較し、OCT 陽性群では異常発生が有意に高率であつたことからテストの有用性を確認した。しかし陽性例の61%に何らの異常を認めなかつたことも指摘し、テストの精度に対する過信を戒めている。〔ハイリスク妊娠の有効な管理手段としての OCT S. Puodzius USSR〕は OCT と胎児心電心音、超音波検査、尿中 E₃、羊水鏡、羊水分析を基礎とした診断基準を検討した。OCT 実施基準として、1) 尿中 E₃ 低下、2) 心音検査からの低酸素症、3) 羊水混濁、4) 胎児発育の3週間のずれを挙げ、OCT が (ハイリスク妊娠での) 分娩誘発の適応の診断基準になることを強調

している。〔ハイリスク妊娠における音刺激と OCT の比較 P.N. Luz Brasil〕はハイリスク妊娠123例に音刺激、OCT を順に実施し、分娩の予後と比較した。その結果予後との不一致例が OCT では47%であつたのに比して、音刺激では28%であり、特に音刺激が OCT 陰性例に有用であつたと述べ、テストの簡便性からも音刺激テストが優れていることを強調している。〔アトロピンテスト併用による OCT の評価 I.G. Kotoulas Greece〕は48例に OCT 後引続いてアトロピンテストを実施し、OCT 疑陽性例の診断に有効であつたとしている。〔NST と CST の妊娠分娩時の胎児情報予測に対する評価。富永、鳥取〕は115例に NST と定量化した OCT を実施し、両テストから分娩時の心拍数変動を予測することは可能であるが、OCT 陰性例でも胎児監視の必要性があると報告している。以上のような報告の主旨から討議は胎児予後の予測に対する OCT の精度と信頼性に集中することが予想される。(武田佳彦)

FC-85 (Abs. No. 847~853)

Fetal and Neonatal Pathology

抗 D immnoglobulin や、光線療法の普及によつて新生児溶血性疾患を中心とする新生児高ビリルビン血症は、その治療面において大きな改善がもたらされた。そのためか、この方面の研究は往時ほど活潑ではないが、反面次の飛躍にそなえるステップの段階であるといえるかもしれない。今回の7題の演題は、いずれも珠玉の力作で、白川氏 (福岡大) は本邦における胎児新生児溶血性疾患の草分け的存在として、その統計的観察をもとに、もつとも頻度の高いD不適合 (91.2%) の症例を中心に既往輸血症の有無、羊水分析、子宮内胎児輸血の諸点において長年の蘊蓄を傾けた成果を報告される。頻度の多いD不適合に対し稀な抗 J_r^a 抗体を有する一家系について述べられるのが浮田氏 (倉敷中央) で、氏によれば遺伝的に劣性である筈の J_r (a-) は、この家系ではあたかも優性であるかのような遺伝をしていたという。Dr. Kelemen (Budapest) と中村氏 (弘前大) は別の視点からこの問題を観察している。前者は PG F_{2α} で人工流産を行つた胎児の fetal dyserythropoiesis (DYEP) を測定して之による子宮内胎児死亡の時間を類推しているし、後者は高ビリルビン血症を、レオロジーの観点、即ち coilplant centrifugation 法によつて赤血球浸透圧抵抗性を、fluorescenc polarization 法にて微粘度を測定して追求している。出生前の検査法として Dr. Philip (Denmark) は、fetoscopy によつて胎児血を採取して、